

ALEXANDRIA

恵泉女学園大学図書館報 アレキサンドレイア

特集 忘れられない！ この一行

Library letter



2014. 4
no. 44

Keisen Univ. Lib

「あいつは悪い奴だから気をつけろ」

(『震える山』 ロバート・クリッツマン著 榎本真理子訳 法政大学出版社 2003年)

榎本真理子 図書館長

(英語コミュニケーション学科)

タイトルに掲げた言葉はパプア・ニューギニアの奥地で現地の人が発した忠告の言葉で、ニューヨーク育ちの若者の魅力的な冒険記『震える山』に出てきます。この本の著者ロバート・クリッツマンさんはニューギニアの奥地で宣教師に出会い、宣教師は彼に「この連中はたちまちもとの精霊信仰に戻ってしまった」と愚痴をこぼします。そのあと道で出会った現地の人々が著者に「あなたはあの宣教師の仲間か」と尋ねます。「いや、違う」と答えると「あいつは悪い奴だから気をつけろ」と親切に教えてくれた、という実際にあった話なのです。

文化人類学者や宣教師など、欧米から来た人たちにありがちな偏見を著者は一貫して持ちませんでした。そのため彼は現地の人々の中に入り込み、信頼を勝ち得ることが出来ました。思い込みにとらわれず客観的に物ごとを見、共感を持って人を見る——それが著者のニューギニアでの調査に役立ち、また20世紀後半だというのに電気もガスも水道もない、石器時代のような生活を送っていた人々の暮らしを体験し、つぶさに観察するのにも役立ちました。

BSE(いわゆる狂牛病)研究の元になったクールーという病気の調査の折の見聞録であるこの本は冒険記のような魅力に満ちた本で、世界各国で訳され、アメリカのディスカバリー・チャンネル、ヒストリー・チャンネルでも取り上げられました。

「アメリカとは全く違う世界を見てみたい」とニューギニアに出かけて行った著者は、様々な苦勞に耐えて辛抱強く調査を続け、次第に現地人のフォレ族の人々に信頼され、子どもたちに慕われるようになります。人種や文明の違いにかかわらず、アメリカでもニューギニアでも親切で信頼できる人がいる一方、利己的で信頼できない人もいること、彼らの考え方の中に現代アメリカ人にも共通する要素が沢山あることに著者は気付きます。アメリカ人の中にも迷信深い人は沢山いますし、プラシーボ(単なる砂糖を「薬だ」として患者に渡すようなもの)は文明国でも有効です。病気が治らないのは患者が「悪い患者」だからだとお医者か思ったり。医者と患者では同じ病気でも受け止め方が違います。自分だけは大丈夫とっいていつもの習慣を続け、そのために病気になったりするの万国共通です。

思いこみにとらわれず、冷静に客観的に人やものごとを見ること——実行はなかなか難しいことです。その重要性をこの本は私たちに教えてくれます。たいていのことには驚かないこの私が、思わず日本語に訳してしまった、それくらい面白い本です。恵泉は勿論、お近くの公共図書館には大概おいてあると思います。ぜひ見てみて下さい。

「ユルス」

青木祐香里 日本語日本文化学科2年

両手両足、聴覚、味覚といった五感のほとんどが失われていて、視覚と触覚のみが無事という人間が、僅かに持ちうる外部との接続器官である眼を潰された時、いったいどうなるのだろうか。私には想像もできない。しかし、私がそうなった時、発狂することは間違いないだろう。そうして、私は私の眼を潰した人間をけして許さないと思う。

貴方は江戸川乱歩の『芋虫』という短編小説をご存じだろうか。この作品は戦争によって四肢を亡くした男性主人公とその妻の物語である。あらすじは以下の通りだ。

《妻には、戦争によって両手両足、聴覚、味覚といった五感のほとんどを失い、視覚と触覚のみが無事である夫を虐げて快感を得るといふ奇妙な嗜好があった。ある時、妻は夫が僅かに持ちうる外部との接続器官である眼が、あまりにも純粹であることを恐れ、その眼を潰してしまう。悶え苦しむ夫を見て彼女は自分の過ちを悔い、夫の身体に「ユルシテ」と指で書いて謝罪するが、間もなく、夫は失踪する。必死に捜すなか、妻は夫が書いた「ユルス」といふ走り書きを発見し、その後、庭を捜索していると、口を開けていた古井戸に何かが落ちる音を聞く……》

虐げられ、眼を潰されてもなお、夫は妻を「ユルス」。私はこの一言だけが未だに忘れられない。「ユルス」といふ一言に秘められた想いは、千の言葉を使っても表現することはできないだろう。これが、私の忘れられない一言(一行)である。

忘れられない！この一行

三浦真実 日本語日本文化学科2年

「報復という業の道を自ら選択した時点で 子供だろうが大人だろうが 関係は無いのだ。」
『蚊(みずち)堂報復録』 鈴木麻純著 p.174

この本との出会いは、ある古書店で偶然他の本を探している時にふと本についていた帯が目に入ったことです。

「地獄の沙汰も金次第——

業を背負う覚悟と金があるのなら——」(扉より抜粋)

頭に強烈に焼き付けられたその言葉には、不思議と納得してしまいました。

「人一人の人生を変える——。それがどれだけ恐ろしい事か。」

そう考えると身の毛もよだつ思いでした。無意識の中で、誰もが一度は思ったことがあるのではないのでしょうか。

「あの人さえいなければ、」「あんな物さえなければ、」「あんな——、」

この作品は人の汚い所を見せるやもしれません。ですが、因果応報、天網恢恢。自分の仕出かしたことはいつか必ず自分に返ってくるでしょう。人に疎まれることも、人を疎むことも、自分自身の選択した道である事には変わりません。恨み辛みを作るのはいつだって自分でしょう。

この作品に登場する三輪辰史(みわ としふみ)は報復を代理執行する人物ですが、報復を依頼した業とその分の代金は本人にきっちり背負わせます。しかし、報復を執行する辰史自身もその代償は負うことになるのです。

この本を読んでもみると、ハッとしてしまう自分に気が付くのではないのでしょうか。

人の人生、自分の人生についてちょっとだけ。心に問いかけて、耳を澄ませる下準備にこの本を読んでみませんか？



忘れられない！この一行

『ハコブネ』

近藤里夏 日本語日本文化学科2年

「あのね、女性から、X、男でも女でもない、どちらでもない性別として生きる道を選んだ人のことを、そう言うんだって。これも性別越境者、トランスジェンダーなんだって。里帆ちゃん、あたしが言いたいのはさ、そういう『第二性徴』だってあるんだってことだよ。」

この台詞は、作品中に出てくるアラサーの女性、知佳子がXジェンダーについて説明している箇所だ。村田沙耶香の『ハコブネ』という本に出会った時、私はちょうど17歳の誕生日を迎えたばかりだった。きっかけは、王様のランチという番組内にあるブックコーナーでの特集だった。この特集を見た瞬間、“この本を一刻でも早く借りて読まなければならない”という使命感で頭の中は一杯だった。

冒頭の文を最初に見た時、眼と心がくぎづけになった。心の中を見透かされた気がしてどきどきした。そして、長年抱えていた悩みの答えに辿り着けたという感覚に陥った。性への違和感、“Xジェンダー”という得体の知れない用語、主人公である里帆の悩み...里帆は自分の心の性が分からずにいた。答えを見つけ出そうと、彼女は自分の感覚に従って本来の性を模索していく。模索していくうちに様々な用語・情報の渦に巻き込まれ、やっと見つけたXジェンダーという答えに縋る彼女の姿は、あの頃の自分と重なる部分が多かった。私も里帆と同じ。ずっと...、同じ事で悩んでいたからだ。もちろんその悩みは、19歳になった今でも自分の中から消え去る事はない。けれどこの本、この一行で私は悩みに救われ、自分自身と向き合う勇気を確実に貰えた。私にとってこの作品は、自身の“セクシャリティ”を語る上ではかかせない一冊だ。

*『ハコブネ』は「選書ツアー」の図書の展示コーナーにあります。

